

北海道

街道 1

北海道らしい道路の典型が、増毛山道（増毛町、安政 4（1857）、町史跡）**A**である。増毛山道は北海道北西部に位置するが、この他にも北海道南東部の猿留山道（えりも町、寛政 11（1799））**A**、様似山道（様似町、寛政 11（1799）、市史跡）**B**も、海岸沿いの難所を迂回する山道という意味では同一系列に属する。増毛山道は、アイヌと交易を行なう権利を持つ商人だった二代目・伊達林右衛門が函館奉行所の命を受け私費 1500 両で開削したもので、日本海沿いの難所を迂回する尾根ルートの上道である。江戸後～末期にかけて蝦夷各地で開かれた山道の中で最も良く当時の姿を留めるだけでなく、その後に設置された明治期の水準点・電柱も残り、近世～近代を通じた北海道らしい道路遺産といえる。明治 39 頃に拡幅され、昭和初期まで利用された後に廃道化した。増毛山道保存会により別荘～岩尾分岐間（9.3 キロ）が歩行できるよう整備された。



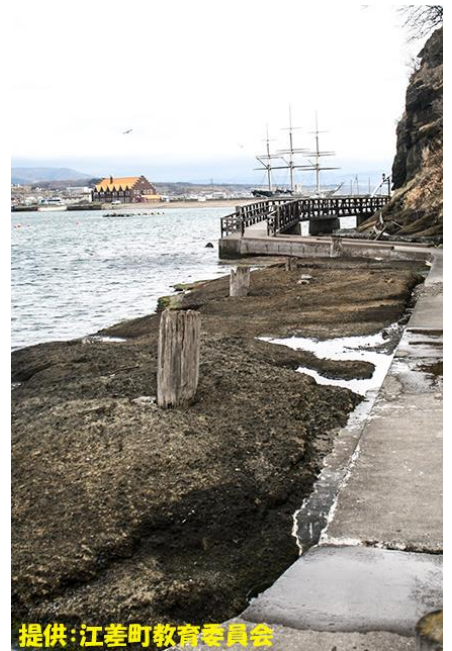
舟運 1

北海道を代表する港湾施設が、大町第一物揚場（函館市、万延元（1860））**A**である。函館開港の翌年、旧居留地の優位津に造られた石積み護岸で、石積み本体が老朽化していたため、景観条例を根拠とした補助事業により景観形成基準に基づき石積みの一部を残して前面を埋め立てた。右上の写真は、修景を受けなかったオリジナル部である。石の積み方は落とし積みに近い。



舟運 2

二つ目の舟運遺産は、日本で最北端に位置する北前船の係留施設、鷗島の係船柱跡（江差町、江戸期）**B**である。江戸時代にニシン漁で賑わった江差港で、波の静かな鷗



島（江戸時代の名称は弁天島）に江差商人により設けられたもので、崖沿いの岩に穴を開け木杭を立て北前船を係留した。崖沿いに遊歩道が造られているため、遊歩道の海側に普通では見られない視点場から繫船用の木杭や穴を眺めることができる。

舟運 3

道内には 7 基の方角石が確認されているが、その代表格が勇払の方角石（苫小牧市、文久 4（1864）、市史跡）**B**と江差の方角石（江差町、安政 6（1859））**B**である。上記で江差の係船柱跡を紹介したので、ここでは勇払の方角石を紹介する。細い円柱の上に、ひと回り大きな径の円形手水鉢を載せた特殊な方角石で、一般的には十二支で方位を示すのに、「東 巽 南 坤 西 乾 北 艮」と刻字され、八方位を用いているのも他に例がない（写真は次ページ）。因みに、江差の方角石も手水鉢兼用で異例である。



撮影:馬場俊介 (2012.6.25)

漁業 1

北海道の主要産業は近世・近代ともニシン漁であった。ただ近代化遺産に比べると残り方は非常に悪い。留萌地区最大の佐賀家漁場関連では、江戸起源の番屋と船着場跡（留萌市、弘化元（1844）以降、国史跡）**B**が残っている。写真に映っている木杭で囲まれた部分が、かつての船着場であったとされる。



撮影:馬場俊介 (2012.6.25)

ニシン漁に関するもう一つの遺構は、「鯨御殿」前の船揚場（寿都町、江戸期?）**B**である。こちらの方は、立派な石護岸が残っているが、建設年代を示す資料はなく、石の積み方から江戸時代の可能性が指摘される程度である。



撮影:馬場俊介 (2009.7.4)

漁業 2

道内に百ヶ所以上残るアイヌの砦（チャシ）は、そのほとんどが戦闘・防衛用であるが、中には魚の見張り用と推定されているものが数ヶ所ある。その代表が石狩川に面した神居古潭チャシ（旭川市、16-18世紀）**B**である。川に面して半円状の壕で仕切られ（写真の右端が石狩川）、竪穴住居遺跡の最奥部に位置している。記録がないので用途は不明だが、鮭漁の際の見張り場だったという説もある。現場に立つと賛同したくなる。



撮影:馬場俊介 (2012.6.25)

産業 1

盛岡藩士・大島惣左衛門（後の高任）が大橋高炉で日本初の本格的連続出銑に成功したのと同年に着工されたのが、古武井溶鉱炉（函館市、安政4（1857）着工、道史跡）**B**である。箱館奉行の命で、蘭学者・武田斐三郎（後に、五稜郭を設計した人物）により計画・施工されたものだが、砂鉄を原料したせいか、それとも、机上の空論だったせいか、2272両を費やし失敗に終わってしまう。文久3（1863）の暴風雨で大破した後は放棄され、切り石で組まれた基壇と水車水路のみが残る。



撮影:馬場俊介 (2009.7.3)

防衛 1

北海道の最大の特徴は、中世のアイヌ対和人、江戸期のアイヌ対アイヌ、幕末の対外国の3種類の城館、砦（チャシ）、陣屋が数多く造られ、良好に残っている点である。

中世の道南十二館では、志苔館（函館市、14世紀後半～末頃?、国史跡）**A** が代表的存在である。津軽海峡に面する小高い丘の上に位置し、四方を土塁で囲んでいる。交易の場でもあった館内の鍛冶屋とアイヌの男性客との争いが発端となった長禄元（1457）のコシヤミンの戦いで陥落し、その後再建したが永正 9（1512）のアイヌの攻撃で再び陥落した。昭和 62 に遺跡公園として整備された。



防衛 2

アイヌ同士の漁労権を巡る抗争、いわゆるシャクシャインの戦いに関連した砦（チャシ）群は、日高町と新ひだか町にまたがって分布している。中で最も規模が大きく保存状態も良いのがメナチャシ（新ひだか町、寛文 9（1669）以前、国史跡）**A** である。ハエ族の首長オニビシが殺害されたと伝えられる。長さ 40m の空壕 3 条が残る。



防衛 3

安政元（1854）、幕府は鎖国を解きアメリカ、ロシアなどと和親条約を結び、蝦夷地を直轄地とした。東北諸藩と松前藩に警護が命じられ、中核となる元陣屋と、地方拠点となる出張陣屋が設けられた。最良の形で残るのは、松前藩の戸切地陣屋（北斗市、安政 2（1855）、国史跡）**A** と仙台藩の白老陣屋（白老町、安政 3（1856）、国史跡）**A** である。戸切地陣屋は、わが国で最初のヴォーバン式星型稜堡として重要だが、五稜郭を後述するので、ここでは白老陣屋について触れる。白老陣屋は広大な敷地に、外・内の二重の曲輪を配置した堅固な構造を採用し、仙台から派遣された 120 名の藩兵が常駐していた。



五稜郭（函館市、慶応 2（1866）、国特別史跡）**A** は、本格的なヴォーバン式星型稜堡式要塞である。17 世紀のオランダで一般的だった要塞の形式を、前述の古武井溶鋳炉で失敗した蘭学者・武田斐三郎が、19 世紀後半の日本に再現してみせた時代錯誤的な施設である。凍結して濠の土手が崩壊しないよう石垣が使われ、備前石工の井上喜三郎が精緻な石組みを見せる。五稜郭はそのものに先進性はないが、箱館戦争の舞台としての歴史的価値は高い。

